

The background features a light pink color with several thin, vertical grey lines. Two film strips are overlaid diagonally: a dark grey one in the upper right and a black one in the lower left. Both strips have white sprocket holes.

シネマ日和

2008 年秋号 (第 1 号)

琉球大学映画研究会

Copyright © 2008 琉球大学映画研究会 All Right Reserved.

部員募集中!!

今からでも遅くない!! そう、あなた!!

いますぐ EIKEN へ急げ!!



琉球大学映画研究会
University of the Ryukyus Filming Club

毎週水曜日 18:30 から、プレハブ 1 次棟共通 11 号室で部会を行っています。

もっと知りたい方は

映研 web site <http://sidenet.ddo.jp/eiken/>

映研 blog <http://ryuudaieikenn.ti-da.net/>

連絡先 : crescentbluefilms@hotmail.com

シ
ネ
マ
日
和

目次

発刊にあたって	5
映研とは?	6
部員紹介	7
最近の活動	8
映画とサッカー (西山寛)	9
「メメント」(奥間勝也)	11
「嗚呼、あんな漢になりたい」(新川泰平)	13
スタンリー・キューブリック (橋爪國臣)	13
「おぞましきもの」としてのプロリー、そしてカカロット (森岡悠輔)	15
この監督がスゴイ (渡辺登志樹)	17
最近見た映画 (新垣藤子)	18
編集後記	19

発刊にあたって

記念すべき琉球大学映画研究会部誌第 1 号である。少なくとも、橋爪氏が知る限り第 1 号である。その昔々、部誌があったかどうかわからないからである。

第 1 号ということで、是非とも部長である比嘉睦氏に巻頭の言葉を書いていただこうとお願いしたのだが、比嘉氏ははっきりと「いつか書くよ。」と言った。彼の「いつか書く」は「そのうち書く」というのではなく、「気が乗ればそのうち書くかもしれないが、期待しないほうがいい」という意味である。それは、ホームページの部長挨拶がいまだに前部長のものであることや、もう 1 年以上前に聞かされたコメディ映画の脚本が 1 文字も書かれていないことから明白である。橋爪氏は自分一人の力ではどうにもならないと察知し、一人寂しくパソコンに向かいながら自分で書くことにしたのだった。

ところで、橋爪氏は部誌を作るようになった理由を全く持って思い出せない。そこで、お気に入りの 1 年生にメールしてみた。すると早速返事が返ってきた。

「さぁ・・・」

やはり彼も知らないようである。結局なぜ部誌ができるようになったかは不明なまま部誌は作られることになったのだ。

しかし、そんなことでは不憫ではないか。せっかく作られたのに、それが何のために作られたのかわからないままでは、読むほうもどう受け取っていいのかわからないかもしれない。そんな部誌を誰が読むだろうか。「あまりにも部誌がかわいそうではないか!!」そう考えた橋爪氏は今からでも、部誌に意味を与えてあげようと考えた。

部誌が出たら誰が読むだろうか。きっと半分ぐらいの映研部員は読むだろう。中央生協の前にも置くらしいので、たまたま目に入って手にとって見て、たまたま中身が気になるか、よっぽど他にすることの無かった暇人は読むかもしれない。OB に郵送すれば OB も読んでくれるかもしれない。

他には...いない。残念だ。このままでは、自分たちだけが楽しんで終わるだけになってしまう。いや、締め切りという恐ろしい強敵に追われながら泣く泣く仕上げた原稿を出しただけではもはや自分たちすら楽しんだとはいえない。女の子、できればかわいい女の子に読んでもらいたい。せめて、かわいくはなくても普通の女の子がいい。彼女らに、少しでも映研に興味を持って入部してくれなければ!! 橋爪氏は叫んだ。

女の子が興味を持つにはどうすればいいだろうか。表紙をピンクにしたらかわいいらしい。しかし、予算が足りない。何か、いいキャッチフレーズをつければいいのかもしい。巷で流行の話題を選べばいいのだ。

『映研ダイエット』『映研アンチエイジング』『映研占い』

己のセンスの無さに絶望した橋爪氏は深く反省した。そして、部誌の意味なんてどうでもいいやと思った。ただ言われたとおり、編集作業をすればいいのだ。

しかし、せめてもと思い、白黒印刷されるとわかっていながら、原稿はピンクの表紙にしたのだった。

副部長 橋爪國臣

映研とは?



映画を撮ったり見たりしているサークルです。映画に詳しい人も、詳しくない人も、映画が好きな人も、実はそうでもない人もいます。みんながわいわいと集いあって、アットホームな楽しい時間をすごしています。

部会を毎週水曜日 18:30 から、プレハブ1次棟共通11号室で行っています。部会では、これまでの内容の報告をしたり、今後の計画を立てたりします。時には、誰かが書いてきた脚本にケチをつけたり、みんなで話し合っ脚本を書いたりもしています。また、レンタルしてきたDVDなんかをみんなで見て、あーだこうだと好き勝手いったりもしています。みんなでわいわい好きなことを楽しみます。

鑑賞会も行っています。スクリーンとプロジェクターを使って、最新のハリウッド映画も邦画も、マニアックなアニメさえ臨場感たっぷりに見ることができます。

映画製作も行っています。脚本・監督・プロデュース・セット・役者・・・すべてを自分たちで探したり、担当したりして、自分が表現したい何かを具体的な映像にしていきます。大変な作業ですが、その分やりがいもあり、完成時には大きな達成感があります。入ったときはみんな素人ですが、たくさん撮れば撮るほど、その腕は徐々に上達していきます。こんな面白いことを知らないまますごすなんて絶対に損、そう言いけることができます。また、初めて映画を作る人たちのために、不定期ですが編集ソフトの使い方などのレクチャーを行っています。



部員大募集中です!!!

気軽に部会を尋ねてきてくださいね

部員一覽

名前	学年	学部	
西山寛	4	理学部	部長(07)
橋爪國臣	4	医学部	副部長(07-09)
幸知玲奈	4	法文学部	会計(07)
新川泰平	4	法文学部	書記(07)
金子林太郎	4	工学部	
内田晃介	4	工学部	
瀬川一	4	医学部	
奥間勝也	4	法文学部	
安田真織	4	医学部	
松野宗孝	3	工学部	部長(08)
比嘉睦	2	法文学部	会計(08)、部長(09)
藤澤義弘	2	工学部	
平田成人	2	工学部	
明大樹	2	法文学部	
松田潤	2	法文学部	
泉尚吾	2	農学部	
本村紗和子	2	法文学部	
森岡悠輔	2	法文学部	
比嘉拓哉	2	沖縄国際大学	
畑山良太	1	法文学部	
一柳雅邦	1	教育学部	
渡辺登志樹	1	法文学部	
荒尾大地	1	教育学部	
新垣藤子	1	法文学部	会計(09)
屋成祥子	1	法文学部	
金城慎一郎	1	法文学部	
東金嶺しおり	1	法文学部	
藤崎大志	1	法文学部	

最近の活動

琉大祭 2008



ここ数年では最も賑わい、2日間で合計400人以上の観客を動員しました。

上映作品

- 映研 CM
- 明日のエコでは間にあわない(橋爪)
- オセロ(奥間)
- ぼくらのたから(一柳)
- 顔(渡辺)
- 明晰夢(畑山)
- 水曜日(藤崎)

チキチキレース 2008



10月11日(土)~12日(日)にチキチキレース2008を開催しました。参加者は7名。朝9時に集合し2チームに分かれて辺戸岬経由、海中道路経由で名護ジャスへ向かいました。名護ジャスで買い物をした後みんなで古宇利島へ。古宇利島では相撲をとったり、写真を撮ったりして、宿泊する宜味村の根路銘公民館へ。調理場も畳部屋も風呂もあり、良い公民館でした！



ゴロゴロして、鍋を食べ、お酒を飲み、罰ゲームをし、トランプをし.....こうして1日目は終わり、翌日、午前中から、ちゅら海水族館に行きました。あっという間の二日間でした。

第2回脚本コンペ

第2回10月31日に脚本コンペが行われました。今回の受賞者は2名が同点で1位でした。どちらもこれが2作目となる奥間氏と渡辺氏。これから早速製作に取り掛かります。お楽しみに。

映画とサッカー

西山寛

世界中で最も多くの競技人口がいると言われるスポーツにサッカーがある。私も正直、映画よりもサッカーの方が好きだ！(笑)

でも、サッカーを題材にした映画は何がある？と聞かれると、そう何本も答えられないと思う。代表的なものを挙げていくと、「シーズンチケット(2000)」「ミーンマシーン(2001)」「ベッカムに恋して(2002)」「少林サッカー(2002)」「GOAL!(2006)」あたりかな。この理由としては2つあると思う。

1つはやっぱり生のサッカーの方が面白い、感動できるってこと。「事実は小説よりも奇なり」って言葉もあるように、予定されたドラマがないからヤバイ試合はマジでヤバイ！(04-05のCL決勝とか03年J12nd最終節とかetc...)

もう1つの理由として、制作費が膨大な映画大国アメリカではサッカー(フットボール)は「不毛の地」と呼ばれるほどマイナースポーツであったことだと思う。最近ではMLS(メジャーリーグサッカー)が発足したり、ベッカムが移籍したりして認知度が上がり、ようやく「GOAL!」が製作された。



日本でも「少林サッカー」や「GOAL!」がヒットし、観た人も多いと思う。でも今回紹介したい映画は「アザー・ファイナル」というドキュメンタリー作品だ。ドキュメンタリーといってもゴール集やプレイヤーの自伝みたいなものじゃなくて、両国の交流も含めて一つの試合の様を追った作品である。

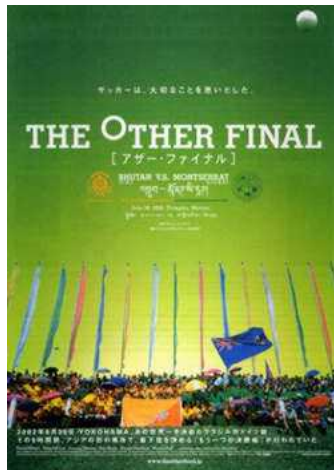
内容としては単純明快。2002年の日韓W杯を覚えている？その決勝、つまり世界一サッカーの強い国を決める日に、世界最下位の国を決めようという企画。なんとってオランダ人が自国のW杯予選敗退の腹いせにFIFAランキングを見て、最下位同士を戦わせたら面白いかも...なんてアホな企画が実現化したものだから。

でもでもところがどっこい、作品はとっっっってもヨクッタ!!!ここには金や権力にまみれた今のサッカー界とは一味違う風景が映し出される(ナイキやアディダスはスポンサーになってくれなかった)。

カリブ海にあるランキング203位のモントセラトが同202位のブータンへ5日間もかけ

てやってくる。感染症にかかったり、監督が不在だったり、審判がなかなか見つからなかったりと、様々な困難が起こる。でもスポンサーがいなくたって真っ白なボールさえあれば、横浜競技場みたいな大きなサッカー場じゃなくても芝生さえあればサッカーは出来る。そして本来なら出会うはずのない人々が言葉を重ね、一つのボールを追い、互いの情熱をぶつけ合う...

本来のサッカーの楽しさがほのぼのと伝わってくる映画「アザー・ファイナル」、是非一度ご鑑賞あれ。



THE OTHER FINAL(アザー・ファイナル)

製作年：2002

製作国：日・蘭合作

上映時間：77min

監督：ヨハン・クレイマー

著者紹介

西山寛 *Kan Nishiyama*

- 琉球大学4年次
- 北海道出身
- サッカー・映画（最近は主に二次元）をこよなく愛する男

「メモント」

奥間勝也



製作年：2001年
製作国：アメリカ
上映時間：113分
監督：クリストファー・ノーラン
出演：ガイ・ピアース
 キャリー・アン・モス
 ジョー・パントリアーノ

【まだ観てない人に...】

映画と一言で言ってもその幅はとても広く様々なジャンルの作品があると思う。琉大映画研も皆好きな映画はまちまちで、部員同士でも話がかみ合わないことがしばしばある。そこで！琉大映画研究会には部員が選んできた映画を夜通しで一気に6つ（約12時間！！）観てしまおうという伝統的（！？）な企画がある。その名も「シネマラソン」。お菓子や飲み物を用意し、椅子の上で見るのもよし、寝具に包まって眠くなるもよし、とにかく自由に映画を観ようというのがこの企画の表向きの趣旨なのだ。シネマラソンをやることによって個人の好みもわかり、部員全員が観ているのでそこで見た作品についてはみんなで意見交換ができたりして部員同士の交流にも役立つ。今回紹介する「メモント」は今年の6月に行われたシネマラソンのトップバッターを飾った作品。

主人公のレナードは妻を殺した犯人に復讐するために自ら犯人を捜しているが、彼は妻を殺されたショックから記憶が10分間しか持続しない前向き健忘症であった。そこで彼は「絶対に忘れたくないこと」はタトゥーを入れて自らの体に刻みこむ。また自分の友人でさえも忘れてしまうのでポラロイドカメラで撮影し、その人の情報を写真の空白部分にペンで書いておいて、その都度確認してこいつは信用できるのか、そもそも誰なのかと自問する。そうやって友人から情報を得たり、逆に人に利用されたりして少しずつ犯人の手がかりを得ることになるのだが…。この映画の特徴はメインストーリーが時間を遡るようにして展開されていることにある。その編集の妙によって、観客はシーンが変わるごとに主人公と同じくわけのわからない状況にさらされるが、そのシーンが終わるころには前のシーンとの因果関係が明らかにされる仕組みになっており、その興味からスクリーンの中に引き込まれる。最初は物語の進行に少し戸惑う部分もあると思うが、観終わった後は、優れた推理小説を読み終わったときのような感覚を味わうことができるように思う。一見単純な状況設定ではあるが、既成の映画にはないような物語進行は、それだけでも観るに値する作品ではないだろうか。

【すでに観た人に...】

前にも書いたように、この作品を面白くさせているのは時間を遡るような展開にしたことによって主人公のレナードと同じくあたかも記憶喪失のような状態に観客を陥れた点にある。しかし観客は次のシーン（時間軸の上では過去）を見せられることによって、行動に至った原因を知ることができる。そこには常に「暴く」ということが伴っており観客は納得する反面、裏切られた印象も受け取るだろう。それが端的に表れているのはレナードが知人の女性の家を訪れるシーンである。誰かに顔を殴られた彼女はレナードに助けを求めるわけだが、次のシーンでその傷は彼女に侮辱され罵声を浴びせられたレナード自身によるものだったことがわかる。またここでは書くものを奪われたレナードが、その事実を記録できなかったことが示されることによって、彼の記録の不確かさと、見る側がそれに依拠して物語を追っていたことに気づかされる。そしてこの映画のラストにおいては、レナードが彼の身に起こった事実を信じられないあまりに記録しなかったり、ありもしない事実を恣意的に書き残していたことが明らかにされる。

「メメント」の面白さはまさにここにあるのではないか。

近年、教科書などにおける記述をめぐる「正しい」歴史を子供たちにどう教育するのかということがしきりに議論されている。しかし記憶し、記述し、認識することの不確かさやそこにはどうしても偏りが出てしまうこと、つまり「正しい」歴史ばかりを教えこむのではなく、歴史に対してどうアプローチするのかということについて考えることの重要性も同時に教えていくべきではないか。「メメント」のように記憶が持続しないという特殊な状況にあるとはいえ、一人の人間の事実でさえもこのように歪んでいくものなのに（しかも彼は自分で記録しているにもかかわらず）、五十年や百年も前の、しかも多くの人が存在しているであろう事象が真実であるという保証はどこにもない。

「メメント」では、この記憶・記述・認識についての問題提起が主人公一人に集約され、体現されている点において非常に優れた作品であるといえる。また、レナードの記憶・記述・認識においてギャップをつくることによって、物語の面白みがさらに際立っている。そして、ある種起源捜しとも考えられるこの物語の最後で暴かれる転倒した事実は、この物語の起源自体がそもそもの間違いで、これまでのレナードの行動は自作自演の茶番だったということが示されている。その意味で「おれが物語を作るって？」という彼自身の問いは非常に象徴的である。私たちは既存の文化的あるいは社会的なコンテキストから逃れることはできないが、自分の認識していることや、その起源が本当に正しいのかということに自覚的になってみるのも時には必要なのではないか。この作品を観てそのように感じた。ここまでは憶えること、つまり忘れてしまわないことに焦点を当てて書いてきたわけだが、物語の中盤あたりでレナードが亡き妻の遺品と思われるものを焼き払うシーンがある。それは妻のことを忘れまいと必死に体に文字を刻み続ける彼の存在とは対照的に、忘れることの狭間で葛藤している姿を感じさせた。このことを最後に加えて締めくくりにしたいと思う。

「嗚呼、あんな漢になりたい」

新川泰平

～『機動戦士ガンダム 第08MS小隊』より、ノリス・パッカード(以下ノリス)～

部誌を発行する？好きなことを書いていい？本当に好きなこと書いちゃうよ！好きなキャラクターについて書いちゃうよ！ってんで、好きなキャラクターについて書こう。え、作品が全く分からない？じゃあ、機動戦士ガンダムから説明するよ、機動戦士ガンダムは戦争+ロボットアニメっていう今までにない切り口で80年代に大ヒットしたアニメだよ、その後も続編がどんどんできていったんだよ。次は第08MS小隊について説明するよ、設定が一番最初にでたガンダムと同じ時期のお話だよ、主人公のシロー・アマダ(以下シロー)とアイナ・サハリン(以下アイナ)が敵味方の垣根を飛び越えて恋愛しちゃうお話だよ、いわゆるガンダム版ロミオとジュリエットだよ、タイトルの第08MS小隊はシローが隊長を勤める部隊の名前だよ。作品紹介終わり

俺がこの作品をはじめて見たのは中学の時、知り合いの家でなんだけど、当時ガンダムのガの字も分からなかった俺だったんだけど、全部で十三話あるこの作品の第十話だけをいきなり見せられたんだよしかも5回も、この十話ってのがノリスが主役の回でまあ見事に惚れちまったわけなんだが、話としてはシローの部隊が護衛任務をしていてそこにノリスが護衛目標を破壊しに来るっていう話で要はノリスはシローの敵なわけだ。これを見た当時の印象は「強い」の一言に尽きる。なんてたってシローの小隊はガンダムが三機と護衛目標のロボットが三機の六機も居ながら、ノリスがシロー達の前におどろおどろしいBGMと共に姿を表し大暴れ、シロー達は六機もロボットが居るのに一機相手にになやってんだかってぐらい弱く見えたなあ、まあその模様はレンタルでもして見てくれ。

鬼神の如き強さはノリスの魅力の一つではあるし、最初に惚れたのもそこではあるんだが、強い敵キャラなんてのはガンダムシリーズにはお約束なんでまあ置いて、俺がその後どっぷりはまり更に惚れたのは彼が人間らしい表情を見せるとこなんだよなあ、10話の冒頭でノリスが司令をしている鉱山基地から撤退することを決めたときに自嘲気味に「基地を放棄、軍人としては無能の証明だな」と呟いたりとか、アイナが恋をしているのを当てたりとか、他にも十話の前にアイナが行方不明になったときに必死に探したりとかあってあるんだけど、ガンダムシリーズ通して強い敵キャラなんてのは何人もいたんだけど、殆どの敵キャラって現実味が無かったんだよ、うん。なんだろうな、いうなら理想の上司って所かしら、実力があって、この人だったらって感じで部下にも慕われてさ俺の理想だよ。そんなこんなで嗚呼、あんな漢になりたい。

もしも次があるならば「美女か野獣」の桜木恭一郎とかさ、「パットン大戦車軍団」のジョージ・S・パットンとかやりてえなあ

スタンリー・キューブリック


橋爪國臣




キューブリックの映画は永遠に朽ち果てない。そう言ってもいいほど、彼の映画は魅力的である。いつの時代になっても通用するであろう斬新な撮影技法、細部までこだわった演技、社会批評にとどまらず人間の根本を見透かすような練りこまれた脚本、誰もが思いつかなかったような選曲。総合芸術にふさわしく全ての分野において、いつの時代になっても追いつくことのできないセンスがある。

いくつかのミニシアター作品のあと、ひょんなきっかけで『スパルタカス』でベンハー以来主流となったスペクタクル歴史映画でハリウッドデビューする。しかし、ハリウッドの映画製作に嫌気を着いた彼は『ロリータ』でイギリスに渡り世間を驚かせる作品に仕上げる。社会問題とまでなったこの映画のロリータを魅力的に描き出した撮影は、特にそのタイトルシーンのマニキュアを塗るシーンに凝縮されている。『博士の異常な愛情；または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』『2001年宇宙の旅』『時計じかけのオレンジ』のSF三部作は、いまだにどのSF映画よりも輝いている。CG全盛の現代にあたって、2001年での全て模型による撮影は、質感や光の反射、ゆっくりと進む音の無い宇宙を見事に描き、CGよりもリアルである。常に左右対称で第三者が遠くから見つめたかのような構図、長々と続くドリー、あっと思わせるシーントランジション、そしてこれらを生み出した新たな撮影技法はいまだに映画界で広く使われている。『バリー・リンドン』での自然光を使った撮影では、NASAが開発した特殊レンズを使い、『シャイニング』は音と特殊メイクでただ驚かせるハリウッドホラーとは一味違う精神的なホラーを作り出した。『フルメタル・ジャケット』『アイズ・ワイド・シャット』の晩年の2作品は円熟味を増したストーリーでやはり問題作となった。

しかし、キューブリックの映画は面白くないのである。いや、面白い、面白くないの前に、理解ができないのだ。台詞の無い猿のシーンが延々と続き、黒い石盤が出てきたと思ったら、光が延々と流れるシーンが続く。字幕が壊れたのかとも思わせる意味不明な台詞と暴力の嵐。淡々と流れるヨーロッパの風景。ニコールキッドマンのヌードと不思議な仮面舞踏会。一度見ただけで、ストーリーを理解することはできない。何度も何度も見て、そして解説書を読んでようやくその話を理解できる。だが、ストーリーなど実はどうでもよいのだ。一度見ても意味はわからない、面白くも無い。しかし、圧倒されるのだ。何なのかかわからない偉大なものを目の前にしたかのように、ただひたすらそれまで2時間スクリーンに映されていた何かが頭から離れない。しばらく言葉を失う。それは、神という人間とは遠く離れた存在が語りかけるようである。巨匠と呼ばれる多くの偉大な監督の中でも、明らかにキューブリックは異才をはなっている。



「おぞましきもの」としてのブロリー、そしてカカロット 森岡悠輔



劇場版ドラゴンボール Z において『燃えつきろ！！熱戦・烈戦・超激戦』で初登場して以来、全国のドラゴンボール少年に計り知れないインパクトとトラウマを与えたブロリー。その極悪非道な性格と、見るものをドン引きさせるテンションの高さ、星を一つ消すほどの威力を持つ「画面を反転させるエネルギー弾」、美形キャラが突然白目マッチョになる。などなどどれも掟破りかつ型破りの演出に彩られたキャラであり、非常に魅力的なキャラでもある。そうであるが故に、劇場版限定のキャラながら信者も多く、ベジータやヤムチャに次ぐ人気キャラとなっている。本稿では、そんな彼の最大の魅力である「イっちゃってる性格」に焦点をあて、その形成の起源を探ってみたい。

なお、本稿はネタバレを激しく含むものであることを初めに注記しておく。

ジュリア・クリステヴァによれば「おぞましきもの」とは「同一性を侵食するもの」として捉えられるという。「同一性の侵食」＝「おぞましきもの」の図式は今ひとつピンとこないと思うので、一つ具体例を挙げてみたい。

例えばゾンビである。ゾンビとは「おぞましく」腐敗した動く死体である。彼らは人に危害を加え、かつ、危害を加えられたものをゾンビ化させるという行動パターンを持つ。ゾンビに噛まれたものはゾンビと化す。「人である」という同一性が揺るがされ、「人で無いもの」へと変化していく、この過程を人は「おぞましい」と感じ、またそのような災厄をもたらすゾンビ自身へもそのイメージが転移していく。これが「同一性の侵食」＝「おぞましきもの」の図式である。

さて、惑星ベジータにおいては、二人の「おぞましきもの」としてのアイデンティティを持つ赤子が生まれる。一人はブロリー、もう一人はカカロットである。

ブロリーはその高すぎる戦闘力（生まれながらにして一万もの戦闘力）がゆえに「おぞましきもの」であった。世襲王権制をとるサイヤ民族にとって、ブロリーは「王権」という同一性を揺らぐ存在以外の何者でもない。源頼朝が義経を嫌悪したように、ブロリーもまた、ベジータ王から嫌悪され、サイヤ民族からの排除＝処刑というある種の必然的な宣告を受けたのである（もちろんそれは未遂に終わったのだが）。

一方、カカロットはそれとは対照的にその低すぎる戦闘力（たったの1）がゆえに「おぞましきもの」であった。「宇宙一の戦闘民族」を自負し、強度にホモソーシャライズされた空間としての惑星ベジータにおいて、「極度に弱い者」もまた、排除の対象となる。現に、地球という「弱い惑星」へと左遷される。ブロリーとは異なった形での「排除」である。

しかし、なぜカカロットは処刑されなかったのだろうか。戦闘力の低いカカロットを生かしておくことは「宇宙一の戦闘民族」の中にひずみをもたらすことにはならないのだら

うか。これについては、サイドの「オリエンタリズム」という概念を用いて説明を試みて見たい。

西洋は東洋を否定することにより、自らのアイデンティティを構築し、強化していく。「遅れた文化を持つ東洋」という否定項を持ち出す事により「優れた文化を持つ西洋」として自らを同定する否定の力学の事を「オリエンタリズム」という。黒は白を、男は女を、強者は弱者との比較、否定によってしか「自分」というものを知りえないのである。

「宇宙一の戦闘民族」というアイデンティティもまた、「宇宙一でないもの」の否定によってしか成り立ちえない。したがって惑星ベジータ、サイヤ民族という閉じられた空間の中ではカカロットという内なる「宇宙一でないもの」を「排除」しつつ「抱え込む」、つまり「境界」の位置へと追いやる事により、アイデンティティの確立を試みるのである。

もっとも、そのような方法によって作られたアイデンティティは崩壊の途を辿るのが常である。現に、頑なに世襲王権を維持しようとしたサイヤ民族は、自ら「宇宙一の素質をもつ」プロリーを手離したことにより、新たに台頭してきた「宇宙一のもの」すなわちフリーザの手によって壊滅されてしまう。王権が王権を守ろうとするが故に崩壊する。不可解なパラドクスがそこにあるのである。

さて、興味深いのは「宇宙一の素質」を持つプロリーという赤子を「宇宙一でないもの」であるカカロットが脅かしたという構図である。カカロットとはプロリーにとってサイヤ民族にもたらしたものと別種の「おぞましさ」を持つ存在であった。

赤子は生まれて6～12月の間に「鏡像段階」を経て自己を認識するという。かの有名なラカンの「鏡像理論」である。赤子は「鏡像」(いうまでもなく、この「鏡像」は比喻であり、「他者のまなざし」として言い換えてもいいかもしれない)を認識する事により、自己の身体の輪郭を形成していく。プロリーにとっての「鏡像」はカカロットであった。カカロットの泣き声をプロリーは恐怖し、怯える。それは、「宇宙一の素質をもつもの」が「宇宙一でないもの」に揺らがされる逆転の構造である。「宇宙一」というプロリーのアイデンティティを揺るがす「おぞましいもの」であった。

この出来事がフロイトで言う所の「幼児体験(新生児だが・・・)」となり、プロリーの深層心理に深刻な傷を与えたのである。そうであるが故に、プロリーは「弱者」に対して過剰なまでの暴力性を発揮するのではないだろうか。このような暴力的破壊性は「宇宙一でないもの」によって揺らがされる事を極度に恐れるが故ではないだろうか。もしかしたらプロリーはただ単にあらゆるものを恐れているだけなのかもしれない。

となれば、彼は実は「宇宙一臆病な存在」に過ぎなかったというバガボンド的哲学に行き着くのである。

この監督がスゴイ

渡辺登志樹

～ 第1回 今村昌平～

生涯

1926年東京に医者の子として生まれる。早稲田大学を経て、松竹大船に入社、小津安次郎などにつくが1954年に日活に移籍し「盗まれた欲情」でデビュー。「にあんちゃん」「豚と軍艦」などを撮った後、独立。「楢山節考」「うなぎ」で日本人で唯一カンヌ国際映画祭で2回グランプリを受賞（世界では5人目）2006年移転性肝腫瘍のため死去。息子は琉球大学出身で映画監督の天願大介



作風

人間の欲望をユーモラスに描く作品に定評があった。喜劇でありながら人の心に重く響く作品、今村曰く「重喜劇」を数多く残している。

彼の描く人間は、そのほとんどが下層社会に生きる人であり、その底知れないエネルギーをそのまま作品に表現している。特に女性に関しては徹底して強い女性を描き続け、大胆な性描写で知られた監督でもあった。

この監督のオススメ映画



カンゾー先生

1998年 東映 今村プロ

誰でも「肝臓病」と診断する為「カンゾー先生」と呼ばれる町医者を主人公に、幼い妹弟のため売春まがいのことをする看護婦ソノ子らの人間模様をエネルギーに描くヒューマンドラマ。



神々の深き欲望

1968年 今村プロ

南海の孤島を舞台に人間の根本を暴き出すドラマ作品。神話が根付く沖縄のとある島に大規模な嵐が直撃。神事を司る根吉が島民たちから厄災の原因とされ罰せられる中、本土の技術師が開発工事前の調査に訪れる。

最近見た映画

新垣藤子



私はたいてい映画に詳しくないので、語ったりはできませんが、

感想を書きます。「P.S.～」は泣けた！でも、悲しいばかりじゃなく、
1人でも楽しく生きる知恵と勇気をくれる作品でした。遠恋中の人にもオススメ！
(笑)

「容疑者～」はストーリー構成に脱帽！映画という武器を上手に利用した作品。
「レミー～」はなめらかなアニメーションの動きが良かった。ストーリーは心暖まる。(以下略)
「キリウ～」はアニメの原点です。色彩が美しい。アフリカの風景が広がります。
少年キリウの素朴な疑問から始まる奮闘記！ジブリ推薦だよ。

こういうものが大好きです。是非みてください。

by ロッサ

編集後記

ようやく編集が終わった。疲れた。明日からは東京に行く。そして帰ってきたらすぐに試験である。しかし、まだ対策は何もしていない。これはかなりまずい。早く皮膚科の勉強をせねば。そんなことを思いながら、テレビをつけて映画を見る。そんな日々が続いている。

愉快的著者たち



映研 web site <http://sidenet.ddo.jp/eiken/>

映研 blog <http://ryuudaieikenn.ti-da.net/>

『シネマ日和』2009年秋号(第1号)

発行者：琉球大学映画研究会

発行日：平成20年11月吉日

編集：橋爪國臣

連絡先：crescentbluefilms@hotmail.com